あとがき

鞍馬を過ぎて京都府と滋賀県の府県境近くを流れる百井川に沿って、皆子山に続くスギ人工林を通り下ったところが安曇川であった。今回、ここを起点として1泊2日の日程でこの安曇川源流から河口までのドライブをした。滋賀県に入って安曇川沿いを走る道は明るく快適なコースだが、少し山中に入るとそこは豊かな森と水の世界である。こうした自然を十分に堪能しながら朽木市場近くの"てんくう"で一泊、翌日は河口デルタの湧水群のある街を訪れた。とりわけこの地方で今でも親しまれ尊敬されている藤樹先生（中江藤樹）のそこここに残る足跡は印象深いものがあった。安曇川流域に広がる自然と歴史と文化を十分に堪能し、水と人々の暮らしが密接に関わっていることの一端を知る楽しい小旅行となった。

（公社）日本水環境学会関西支部川部会／駒井幸雄

参考文献

・金子有子ら(2007)滋賀県琵琶湖環境科学研究センター試験研究報告書第3号
・高島市観光協会HP　http://www.takashima-kanko.jp/
・葛川振興協会「葛川かや葺の家」パンフレット

既刊の紹介

・源流を行く 編	『名張川』(2013)『木津川上流』(2013)『高時川・余呉湖』(2014)『桂川・由良川源流』(2014)
・おうみの川 編	『赤野井湾と流入河川』(2013)
・みやびな川 編	『白川』(2010)『鴨川・明神川』(2012)『琵琶湖疏水』(2013)『京の川』(2014)『高野川』(2015)
・歴史とロマンの川 編	『瀬田川・宇治川』(2010)『保津川・桂川』(2011)『芥川』(2011)『猪名川』(2013)『天野川』(2015)
・なにわの川・庶民の川 編	『東横堀川・道頓堀川』(2011)『恩智川・生駒の川』(2012)『中河内の川』(2013)『大川と大阪市内河川』(2013)

〈企画編集〉（公財）琵琶湖・淀川水質保全機構
（公社）日本水環境学会関西支部川部会
（一社）近畿建設協会

琵琶湖・淀川　里の川をめぐる
～ちょっと大人の散策ブック～〈おうみの川編〉

安曇川（Adogawa）

〔発　行〕平成27年3月
〔発行者〕公益財団法人　琵琶湖・淀川水質保全機構
〒540-0008 大阪市中央区大手前1-2-15（大手前センター ビル4F）
TEL. 06(6920)3035　FAX. 06(6920)3036
<ホームページ> http://www.byq.or.jp/
＊散策ブックはホームページ上で閲覧することができます＊
（公財）琵琶湖・淀川水質保全機構では、寄付へのご協力・賛助会員のご入会をお願いしております。戴いた会費・寄付金は、当機構を通じ琵琶湖・淀川流域の水質保全に活かされます。詳しくは、ホームページをご覧ください。

©BYQ, 2015 Printed in Japan

琵琶湖・淀川　里の川をめぐる

～ちょっと大人の散策ブック～

おうみの川　編

安曇川

（Adogawa）

（公財）琵琶湖・淀川水質保全機構
（公社）日本水環境学会関西支部川部会
（一社）近畿建設協会

「琵琶湖・淀川流域散策ブック」のねらい

（公財）琵琶湖・淀川水質保全機構と（公社）日本水環境学会関西支部川部会、（一社）近畿建設協会は、大都市圏の川を水質という側面だけではなく総合的に把握し、その機能を再評価するために川部会が2001年より行ってきた活動の成果を基礎に、「琵琶湖・淀川流域散策ブック」をまとめることになった。

この散策ブックは、琵琶湖・淀川流域の河川を散策する時に気軽に携帯できるガイドブックを意図して作られており、対象河川の概要はもとより、流域の見どころ、名水や滝、水質や生物、その川にまつわる興味深い話などが、豊富な写真や地図を用いて解説されている。

散策ブック全体は、「源流を行く」、「おうみの川」、「みやびな川」、「歴史とロマンの川」、「なにわの川・庶民の川」の5編で構成され、それぞれ5、6リーフレットからなる。本リーフレットでは、おうみの川編として、滋賀県の琵琶湖に注ぐ河川で二番目に大きく、琵琶湖西岸では最大の安曇川を取り上げた。

本ブックシリーズが、琵琶湖・淀川流域の河川に親しみを感じ、流域を散策するための一助になることを願っている。

目次

CONTENTS

ねらい・目次

安曇川流域の概要 …… 02

源流域～久多地区とその周辺～ …… 03

コラム１　千日回峰行 …… 05

上流域から中流域～若狭街道（鯖街道）～ …… 06

コラム２　朽木森林実験流域 …… 07

中流域～朽木本陣とその周辺～ …… 09

下流～安曇川河口デルタ～ …… 11

コラム３　近江聖人 中江藤樹 …… 12

コラム４　安曇川の水質 …… 14

（表紙写真／安曇川下流から琵琶湖を望む）

1 安曇川流域の概要

安曇川は、京都市左京区北東部の丹波高地東端となる百井峠近くに源流をもち、流域面積311㎢、流路延長56kmの琵琶湖西岸に注ぐ最大の河川であり、琵琶湖流入河川の中では、東岸の野洲川に次いで2番目に大きい。

安曇川源流となる百井川は、京都府から東の滋賀県に向かって流れ、滋賀県に入ると安曇川となる。川沿いの道は府県境で途切れ、直線距離にして100mばかり対岸同士で未接続となっている。そのため京都市内から安曇川に向かうためには、国道477号線国道367号線を北上し、花折トンネルを越えて行くことになる。

安曇川は、比良山地と丹波高地にはさまれた「花折断層」によって形成されたV字峡谷を北流していく。高島市朽木（旧・朽木村）に入ると、左岸側から流入している久多川、針畑川、北川、麻生川なども支流を合わせながら朽木市場を過ぎて向きを大きく東に変え、河口デルタに広がる高島市安曇川町の東部で琵琶湖に注いでいる。安曇川に沿う若狭街道の両側には中・古生層の丹波層群が分布し、東側に連なる比良山地の最高峰の武奈ヶ岳（1,214m）もその中にある。一方、比良山の大部分とその周辺の山々は花崗岩からなっている。

安曇川源流域の久多地区の年平均降水量は2,500mm（日本の年平均降水量：1,720mm）で平均気温は13℃、冬期の積雪深は2mに達する。ブナ林などの自然林とともにスギ・ヒノキの人工林が分布し、やや標高の低い地域ではアカマツ林、クヌギ・コナラ林などの二次林となり、下流のデルタ地域には農地が広がっている。ツキノワグマ、イノシシ、シカ、ニホンザルなどが生息し、源流や支流上流にはイワナやアマゴなどをみることができる。

安曇川流域図

2 源流域～久多地区とその周辺～

京都市内から**国道477号線（鞍馬街道）**に道をとり、鞍馬を通りさらに北に進むと**百井峠**（741m）に到る。古くから難所としてその名を知られ、魑魅魍魎が現れる峠と伝えられていた。ここを越え下って行くと、安曇川源流域の**百井川**に到る。百井峠から**百井集落**に至る途中に、京都の北山では古くからあるキャンプ場として知られる**京都市百井青少年村**がある。

京都府と滋賀県の府県境に位置する**皆子山**（972m）は、国道367号線を挟んで東に連なる比良山地の**蓬莱山**(1,174m)や**権現山**(996m)と対峙する京都府の最高峰である。皆子山山頂までは源流域～久多地区とその周辺～百井地区からも

百井峠

京都市百井青少年村

百井集落

皆子山方面

八丁平
〔写真提供：京都府ホームページ〕

百井川上流

神泉水

葛川集落

葛川少年自然の家

登山道が整備され、四季を通じて多くのハイカーが訪れる。この地域は**花折断層**の一部となるため、足場の悪い所も多くみられる。皆子山の北にある**八丁平**は、近畿地方では珍しい高層湿原として知られている。標高は約800m、面積は約5haで、周辺にはクリ、ミズナラなどの広葉樹とスギ、ヒノキなど針葉樹の天然の混交林が広がっている。

百井地区から安曇川には、国道477号線を少し戻って**国道367号線**に入りその先の**花折トンネル**を越えて至る**葛川地区**で出会うことになる。途中には、**神泉水**呼ばれる湧水が湧き出でており、遠くからもこの水を汲みに来る人たちの姿がある。葛川には**葛川少年自然の家**と、それに隣接して地元協力のもとに移設された茅葺民家が、**葛川かや葺きの家**として民具の展示とともに公開されている。

ここには、比叡山の高僧**相応和尚**が創建し、瀧にまつわる伝説が伝わる**明王院**（コラム参照）がある。明王院から比叡山に向けて登る途中には、この地域開拓の祖神とも水の神ともいわれている**地主神社**がある。その社殿は拝殿、弊殿、本殿が一直線に配置され、1502年に建てられた本殿は重要文化財である。さらに登ると**三ノ瀧**（別名**不動滝**）に至る。この滝は、「近江水の宝」に選定された落差20mほどの直瀑で、天台回峰行の最終修行場として神聖視されている。

葛川かや葺きの家

地主神社

三ノ瀧

京都市最北端の**久多地区**は、平安時代以前から都への木材の供給地として開かれていたが、一説には平家の落人も逃れてきたとも言われている。かつて久多地区の人々は、スギを中心とする天然木の供給や炭の生産によって生計を立てていた。近くの**大川神社**には、京都市の天然記念物（1987年）として指定・登録されている樹高約40m、幹周約6.6mの**久多の大杉**が鎮座している。また、久多川上流の滝谷には、「**一の瀧**」、「**馬尾の瀧**」と呼ばれる滝がある。

久多の産土神であり安曇川沿い一円の地主神を祀る**思古淵社（志古淵神社）**では、国の重要無形民俗文化財に指定された**花笠踊**や、献火行事である**松上げ**、神社の氏子が弓を引く**山の神・お弓**などの多くの祭事が行われている。

いこいの里久多キャンプ場は、キャンプや日帰りバーベキューを楽しめる施設が整い、シーズンには自然を求めて訪れる家族連れなどで賑わっている。

久多の大杉
〔写真提供：京都市文化財保護課〕

久多の花笠踊
〔写真提供：久多里山協会（撮影：谷口千恵子）〕

久多キャンプ場

コラム❶ 千日回峰行

明王院は平安時代初期に開かれた天台修験の道場であり、現在も天台宗行者の厳しい修行が行われている。寺の開基相応和尚は比叡山を代表する荒行の1つで、1,000日間休むことなく比叡山中のお堂をめぐる「千日回峰行」を始めたことでも知られる。近江各地に修行の場を求めていた相応和尚が葛川を訪れたときに、土地の神である「思古淵神」から修行の地として認められたとされる。1715（正徳5）年に建立された明王院本堂は重要文化財に指定されており、不動明王立像（重要文化財）は室町時代に桂の木で彫られたと伝えられる。

現在も、毎年7月に明王院の伝統行事として行われる「太鼓まわし」は、この地方の祭りの一つとして知られている。

明王院本堂

若狭街道

街道沿いの鯖鮨の店

地震による崩落地

3 上流域から中流域 ～若狭街道（鯖街道）～

安曇川に並行して走る**国道367号線**は、旧若狭国小浜と京を結んでいた**若狭街道**を通る。平安時代から、小浜の港に水揚げされた海産物を京に送り届ける街道として知られ、江戸時代には小浜の鯖を京に運ぶ街道として重要な位置を占めたことから、「**鯖街道**」と呼ばれるようになり、今も街道沿いにはいくつもの鯖鮨の店が並んでいる。

この若狭街道は、直線的に50～60kmにわたって発達した典型的な断層地形を形作る花折断層に沿ってつくられている。1662（寛文2）年に起こったM7.6以上の寛文地震によって、**朽木谷**では目前の山が崩れ、山津波となり麓の梅ノ木と町居のすべての民家と260余名の人々が100mもの厚さの土砂に埋もれるなど大きな被害を生じたといわれる。現在でも、国道367号線沿いにはこの時に崩落した跡を見せる崖が数多く残っている。

朽木・葛川県立自然公園は、琵琶湖国定公園の**比良山地区**の西側に隣接し、安曇川上・中流域

のV字谷、中流域の広がり感のある河原、点在する集落、変哲のない森林景観の広がりはひなびた山村景観を形成し、支流の**針畑川**上流域では渓谷景観が骨格となっている。

植生はスギ・ヒノキ植林が中心で、一部コナラなどの落葉広葉樹林、アカマツ林などによって占められている。針畑川上流域の**生杉地区**には、今日ではわずかしか残っていない**生杉のブナ林**があり、遊歩道が整備されブナ林の雰囲気を十分に味わうことができる。途中にはイワナ・アマゴの渓流釣り場と関西最大級のルアー・フライ釣り場を備えた**朽木渓流魚センター**があり、子供から大人まで楽しむことができる。

朽木地区の源流部には**トチノキの巨木群**が生育しており、市民グループ「巨木と水源の郷をまもる会」による保存活動が進められている。2012年には樹齢推定約500年、高さ29m、幹回り8.07mの県内最大のトチノキの巨木が発見されたとのことである。

生杉のブナ

朽木渓流魚センター

コラム❷ 朽木森林実験流域

森林伐採・植栽がそこから流出する渓流水の水質に及ぼす影響を調べることを目的として、滋賀県琵琶湖研究所（現滋賀県琵琶湖研究・環境科学研究センター）が、植生（コナラやクリの二次林）や地質（中・古生層の丹波層群）が類似した隣接する2つの森林小集水域（滋賀県高島市麻生）で実施した、日本初の対照流域法による研究である。

渓流流末には量水堰が設けられ、1991年から水質と水量のモニタリングが開始された。2流域のうちL流域は1996年12月と翌年3月に皆伐され、1998年5月にスギ苗が植栽された。対照流域のR流域については非伐採のままで放置された。

伐採の約1年後から、L流域では硝酸態窒素と全窒素濃度が急上昇し、年流出負荷量は3年目には伐採前の約6倍に上り、4年目にやや低下し、10年目の2006年7月にようやく伐採前の濃度レベルにほぼ回復した。一方、R流域の窒素は低濃度で推移していたが、2004年6月頃から硝酸態窒素と全窒素濃度は共に上昇し始め、2006年にはL流域よりも高濃度になった。この水質変化はR流域のナラ枯れの進行と同調しているようであり、現在も調査がされている。

森林実験試験地
〔写真提供：國松孝男〕

トチノキの巨木
〔写真提供：巨木と水源の里を守る会〕

高島市立くつき森林公園
〔写真提供：高島市観光協会〕

武奈ヶ岳
〔写真提供：滋賀県ホームページ〕

ガリバー青少年旅行村

八ツ淵の滝
（魚止めの淵㊤・障子ヶ淵㊦）

支川の**麻生川**をさかのぼると、朝日新聞社が創立100周年を記念して1979年に森林環境基地として設立・開設し、2003年に閉鎖された後に“くつきの森”として高島市へ引き継がれた**高島市立森林公園くつきの森**（旧朝日の森）がある。かつてのホトラ山や針葉樹の人工林が大部分を占める自然豊かな森からなる関西の典型的な里山である。

安曇川の右岸側に連なる比良山系の最高峰である**武奈ケ岳**（1,214m）の東側中腹にある**ガリバー青少年旅行村**は、ガリバー旅行記に登場する人物をモチーフにしたアスレチックや宿泊施設のほか、魚つかみ体験、キャンプ等が楽しめる。ここは、朽木本陣側からは県道295号線を上り、近江高島方面から来る県道296号線を進んだところにある。

ガリバー青少年旅行村の入り口から続く道路をしばらく進むと、武奈ケ岳に続く遊歩道が整備されている。この遊歩道を谷に向かって下っていくと、武奈ヶ岳の北東に端を発する**鴨川源流**に出会う。この渓流には、日本の滝100選の1つに選ばれている**八ツ淵の滝**があり、下流から**魚止めの淵・障子ヶ淵・唐戸の淵・大摺鉢・小摺鉢・屏風ヶ淵・貴船ヶ淵・七遍返し淵**の8つの淵が連なっている。八ツ淵の滝を通る沢歩きのルートは、足元も悪く相応の装備と経験が必要である。残念ながら、台風の被害によって現在は大摺鉢より上流は通行不能となっているために、今のところ全ての滝を見ることは難しい状況にある。

4 中流域 ～朽木市場とその周辺～

安曇川中流部で麻生川との合流付近は**朽木市場**と呼ばれ、古くから朽木地域の物資の集散地であった。鎌倉時代から江戸時代にかけてこの地を支配していた朽木氏は、織田信長の朝倉攻めにおいて、浅井長政の裏切りにあった織田信長が朽木村経由で京都に戻る際に助けたことで、後に家臣に取り立てられた。朽木本陣には、明治維新まで続いた朽木氏の居城があった。朽木は昔から林業が盛んで、安曇川ではかつて木材運搬のためのいかだ流しが行われていたため、いかだ流しの水運安全を祈る「しこぶち」信仰が今も伝わる。

朽木市場から少し上流の左岸には**桑名の渡し跡**がある。往時にはここから対岸に渡ったとのことだが、今はそれを示す表示がなければそれとはわからないただの河原風景である。

右岸側には安曇川の中にできた小さな小島があり**弁天島**と名付けられている。案内板によるとカルガモの生息地となっているとのことである。岸側から弁天島を通ってぐるっとひと回りができる遊歩道は、今は荒れた状態となっており、足元には十分な注意が必要である。

朽木市場から安曇川を道路沿いに少しさかのぼった右岸側には、1924年に発電が開始された水路式発電所である**関西電力栃生発電所**(1,370kW)がある。

朽木市場の左岸側には、1243(寛元元)年、宋から帰国した曹洞宗の開祖、道元禅師が朽木の里を訪れた際に、朽木氏に一寺の創建を勧めたといわれる**興聖寺**がある。この境内の**旧秀隣寺庭園**(別名**足利庭園**)は、第12代将軍足利義晴が反乱の難を避け、約三年間ここに滞在した折、将軍を慰めるために細川高国が贈った庭園であるといわれており、国の名勝指定を受けている。

桑名の渡し跡

弁天島

栃生発電所

興聖寺

旧秀隣寺庭園

くつき温泉てんくうのシンボル天狗の湯
〔写真提供:高島市観光協会〕

朽木市場から東の小高い所に**グリーンパーク想い出の森**がある。緑豊かな大自然の中の広大な森林公園で、キャビン、バンガロー等での宿泊の他、テニス、サッカーなどスポーツができる。ここにある、アルカリ性単純温泉の**くつき温泉「てんくう」**は日帰り客でに賑わうが、宿泊もできる。隣接の県立朽木いきものふれあいの里センターは、域内の野生生物の標本などが展示され、野外体験もできる施設だったが、2014年3月末で閉館された。

朽木市場の中心となる**朽木本陣**には、**鯖街道・丸八百貨店**や**道の駅「くつき新本陣」**などの施設がある。無料休憩所のほか、鯖街道の資料展示などもされている。地元の農産物や加工食品をはじめとした特産物が販売されている。鯖鮨とともに琵琶湖の名品“鮒のなれ鮨”ならぬ“鯖のなれ鮨”も売られており、日曜朝市や平里の市などでは地元の人たちが産品を出品している。朽木陣屋屋敷跡には、旧朽木村の人々の生活を学べる**朽木資料館**が整備されている。この地方で使われていた民具、農作業用具、民家などが展示され、朽木の歴史や文化の情報発信の拠点である。

道の駅「くつき新本陣」
〔写真提供:高島市観光協会〕

朽木資料館から見た朽木本陣跡

近江耶馬渓

奥山ダム

安曇川は、朽木市場から少し下流で東に大きく曲流する。この付近は、絶壁を形成しながら大きく蛇行し、奇岩・怪石が散在する川原が開けており、大分県山国川の上・中流域にある耶馬渓になぞらえて**近江耶馬渓**と呼ばれている。しかし、現在は水量も少なく渓谷というイメージからはほど遠い。

左岸の北側の道を進んでいくと，水道用水源として建造されたアーチ式**奥山ダム**がある。自衛隊の演習地であるため、立入禁止の立札が目立つ。

5 下流～安曇川河口デルタ～

安曇川下流域は、琵琶湖西岸扇状地の一つの安曇川扇状地・三角州になっており、そこここに湧き出でる湧水も名高い。この地域は、古くから歴史・文化・自然が今もなお多く点在するが、中でも日本陽明学の祖、中江藤樹の生誕の地として多くの人に親しまれている。安曇川の氾濫を防ぐために植えられた真竹を使ったのが始まりと言われ、300年の歴史と全国90％の生産量を誇る**高島扇骨**の産地でもある。

安曇川下流では、安曇川を横断するように簀を扇形に設置し、遡上してきた鮎を川岸に追い込んで捕らえる伝統的な漁法の**簗漁**が行われている。水産庁により「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に選定された。奈良時代の頃から発展してきた歴史ある伝統漁法である。

安曇川扇状地にある湧水のなかでもよく知られているのは、高島市新旭町の**針江地区**にある**針江の生水**で、平成の名水百選に選定されている。生きた水、生かされた水という意味から「**生水**」と呼ばれており、**川端**と名づけられた井戸は今も107箇所残っている。この「川端」は昔から「ショウズヌキ」と呼ばれる。「穴太の黒鍬」という歴史に名を残す高度な土木技術によって支えられた巧みな石積みで造られており、。針江地区をはじめ湖西南部にも多く見られる。針江地区には湧水を使った公園がある。生水は個人の家にあるため、地元の人達によるツアー（有料）に参加し、その由来等を聞きながら見学をすることになる。

秋葉の水は、安曇川の右岸となる安曇川町中野にあり比良山系の阿弥陀山が水源となっている。集落に続く道路沿いの一角から湧き出ており、昔からこの地区の生活用水として利用されていた。2004年に復活しまわりは石造りできれいに整備され、その由来が記された石碑が建てられている。夏には年中12.5℃の秋葉の水を使った流しそうめんがイベントとして行われている。

安曇川下流

高島扇骨
〔写真提供：高島市観光協会〕

安曇川下流のやな漁
〔写真提供：高島市観光協会〕

針江地区の湧水公園

秋葉の泉

三尺の泉

中江藤樹の書院跡

安曇川町上小川の集落内に、近江聖人中江藤樹の住居・講堂跡で明治に再建された**藤樹書院**（国史跡）がある。当時から掘抜井戸があり、これを改修して地下水の湧出を復活させた自噴井戸が**三尺の泉**である。門弟であった熊沢蕃山の、「万里の海は一夫に飲ましむる事あたわず、三尺の泉は三軍の渇きのやむるに足る」と述べたことに由来すると伝えられる。

安曇川が流入する琵琶湖畔の北には琵琶湖畔にいくつかある水鳥観察施設の一つの**新旭水鳥**

コラム ③ 近江聖人 中江藤樹

中江藤樹（1608-48）は、近江の国に生まれた江戸時代初期の儒学者で日本陽明学の祖と知られる。その説く所は身分の上下をこえた平等思想に特徴があり、武士だけでなく農民、商人、職人にまで広く浸透し江戸の中期頃から、自然発生的に「近江聖人」と称えられた。熊沢蕃山は代表的な門人のひとりである。

安曇川町には、中江藤樹の遺品を展示する中江藤樹記念館があり、館内には2展示室・講義室・図書館・収蔵庫がある。また、藤樹神社や門人たちに学問をといた藤樹書院跡などゆかりの施設が点在し、中江藤樹がこよなく愛した藤の花は、藤棚や藤の盆栽展の開催などで地域の人に親しまれている。藤樹記念館の隣には、道の駅「藤樹の里あどがわ」があり、にぎわっている。

中江藤樹
〔写真提供：高島市良知館〕

藤樹神社

観察センターがある。冬になると、カモ類をはじめとする数多くの水鳥が観察でき、オナガガモ・マガモ・コガモ・ヒドリガモ・カルガモなどの淡水ガモや潜水ガモ、カイツブリなどの他、コハクチョウやオオバンの大群も見られることがある。

河口の左岸には**滋賀県立びわ湖こどもの国**がある。利用者自らが遊びを創り出すというユニークな施設で、広い園内には芝生広場や全長40mもある大型遊具、アスレチック遊具、冒険水路、キャンプ場、虹の家などがある。

湖畔には北湖を取り巻くように「**近江湖(うみ)の辺の道**」が整備されており、この道に沿って安曇川河口から南に向かって行くと、約1kmにわたって白砂青松が続く遠浅の美しい**近江白浜水浴場**がある。その隣にある**萩の浜**は湖西で最も古い水泳場であり、遠浅の浜と緑の松林に恵まれた静かで風光明媚な浜で、「日本の渚百選」にも選ばれている。この周辺は**鴨川勝野園地**と名づけられた景勝地である。

湖岸の高島市勝野はいにしえの風情ただよう旧城下町であり、陣屋の惣門や武家屋敷が今なお残っている。こうした築150年の旧商家が手づくりで改修され、1号館から8号館まで「**びれっじ**」として再生整備されている。上述のガリバー青少年旅行村と八淵の瀧へ向かう県道296号線は近江高島駅の少し北を通っている。途中の畑地区には359枚もの棚田が標高差100mにもおよんで綺麗に積み上げられ、「日本の棚田百選」に選定されている。

さらに南下すると、万葉の時代には「香取の海」と呼ばれた琵琶湖の入り江で、現在は内湖のフナ、ブラックバスなどが生息する**乙女が池**がある。今はバス釣りのメッカとなっており、散策路も整備されている。

新旭水鳥観察センター

滋賀県立びわ湖こどもの国
〔写真提供:高島市観光協会〕

近江白浜水浴場

萩の浜

鴨川勝野園地

高島びれっじ
〔写真提供:高島市観光協会〕

畑の棚田
〔写真提供:高島市観光協会〕

乙女が池

白鬚神社

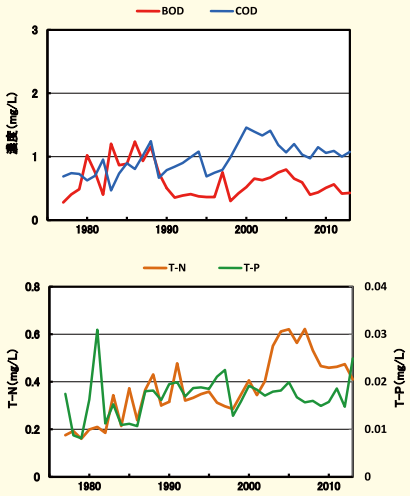
湖中の白鬚神社大鳥居

その先にある**白鬚(しらひげ)神社**は、近江最古の神社と言われ、湖中にある朱塗りの大鳥居が有名であり、国の重要文化財に指定された本殿の鳥居と対峙している。境内には与謝野鉄幹・晶子夫妻が訪れた時に詠んだ歌碑がある。

コラム❹ 安曇川の水質

安曇川下流の常安橋地点におけるBOD、COD、全窒素(TN)、および全リン(TP)の経年変化を右図に示す。BODは1988年度まで全体として上昇しているが、1989年度に低下後はAA～A類型の環境基準値(1mg/L以下)以下でほぼ横ばいである。CODはBODと同程度だったが、BODが下がった1990年度以降は常にBODより高い1mg/L以上の濃度である。

TNとTPは、2001年度までは同様の変動をしながら全体としては増加傾向が認められる。TNが2002年度後に急増した原因については、安曇川流域の山林で広がるナラ枯れの影響が示唆されている。TPは2002年度以降も横ばいで推移するなどTNとは大きく異なる濃度変動を示すが、今後の変化をみていく必要がある。



安曇川常安橋の BOD、COD、
全窒素(TN)および全りん(TP)の経年変化